

編集者の功罪

—— 滝田樗陰と谷崎潤一郎 ——

高 橋 秀 晴

一 緒言

『中央公論』の主幹として同誌を日本有数の総合雑誌に育て上げた滝田樗陰^①は、一八八二(明治一五)年六月二十八日、秋田県南秋田郡手形新町下丁(現秋田市手形新栄町)に、滝田家の長男として誕生した。保戸野小学校を経て、一八九五(明治二八)年に秋田尋常中学校(現秋田高校)に入学、一九〇〇(明治三三)年、同校を卒業した。その後、第二高等学校を経て、一九〇三(明治三六)年九月、東京帝国大学(現東京大学)英文科に進学する。

大学に入ってからすぐの一九〇三年一〇月、樗陰は、学資を稼ぐために『中央公論』でアルバイトをするようになった。この雑誌の起源は、一八八六(明治一九)年四月六日に結成された「反省会」の機関誌『反省会雑誌』(一八八七年八月創刊、一八九二年五月に『反省雑誌』と改題)に求められる。その有力な後援者であった大谷光瑞^②(一八七六年～一九四八年)は、日本民族の海外発展と仏教の世界的広布を主張して旧勢力と対立したため、一八九六年一二月、雑誌の発行所を京都市から東京市本郷区(現東京都文京区)駒込西片町一〇番地へ移した。

発行に際しては、編集主任と庶務を桜井義肇が、庶務主任と編集を麻田駒之助が担当した。麻田は後に初代の中央公論社社長となる人物である。麻田家は室町時代から代々本願寺の寺侍を務める家柄で、駒之助は光瑞の弟妹たちの家庭教師をしていた関係で仕事を任されるようになったのだった。

雑誌の傾向は仏教雑誌から総合雑誌へと変化しつつあったが、売れ行きはよくなかった。その原因の一つとして『反省雑誌』という雑誌名が窮屈な印象を与えることが挙げられ、一八九九(明治三二)年一月号から『中央公論』と改題される。それでも一向に好転しない状況が続く中、樗陰が畔柳都太郎^③の紹介で関わるようになったのである。

樗陰はまず、「海外新潮」欄を担当した。これは、『反省雑誌』が東京移転後に「外報」欄を拡張したもので、海外の新聞・雑誌の論説を翻訳して世界の動向を紹介するというコンセプトを持っていた。材料は主に京都にいる光瑞が自ら買った新聞・雑誌に印を付けて送ってよこしていて、その関係もあり『中央公論』となっても重視されている欄であった。

樗陰の仕事ぶりを見ていた近松(当時徳田)秋江(一九〇四年一月入社)は、「本誌入社当時の瀧田君」(『中央公論』一九

二五年一二月号)において、英文を読みこなす語学力に加え政治・外交・社会等に関する幅広い常識を備えた「聡明穎悟」の人と讃えている。また、その人となりについては、「素樸な、矯飾のない、卒直で淡白で、腰の低い、厭味ならぬ程度に」とどほりの礼儀に富んだ青年」であったため、「初対面から、もう、瀧田君に、まあ、いはば惚れてしまった」旨を回想している。

近松秋江編集長の許でアルバイトをしていた樗陰は、秋江が退社した一九〇四年九月、英文科から政治学科に転じ、翌月には正式に『中央公論』の記者となった。そして、秋江の後任高山(後に大山と改姓)覚威とともに小説掲載を提案し、夏目漱石に「一夜」(一九〇五年九月号)、「雑露行」(同年十一月号)、「二百十日」(一九〇六年一〇月号)を執筆させたことで、社内外で大きな存在感を示し始める。彼が谷崎潤一郎と見えたのは、それからさらに数年後、雑誌の発行部数の大幅増を背景に辣腕編集者として広く知られるようになった頃であった。

二 邂逅

谷崎潤一郎が文学で身を立てる決心をしたのは、一九〇八(明治四一)年、二二歳になる年であった。第一高等学校英法科を卒業した彼は、「学校を怠けるのには一番都合がいい」(『青春物語』、『中央公論』一九三二年九月号)、「一九三三年三月号、ただし一九三二年一〇月号以降「若き日のことども」と改題)ということもあって東京帝国大学国文科に進学する。

谷崎が目指したのは、最初の小説「刺青」(第二次『新思潮』一九一〇年一月)が、倒錯、女性拝跪、フェティシズムをモチーフとしていたことから明らかのように、当時絶頂期にあった自然主義とは対極に位置する文学であった。勢い、強い逆風の中での船出となった。たとえば、一九〇九(明治四二)年、『帝國文学』に送った戯曲「誕生」は没となったし、『早稲田文学』に投稿した小説「一日」も握りつぶされてしまう。神経衰弱に陥って、東北の新聞社に勤めようとしたりもしている。

一九一〇(明治四三)年九月、第二次『新思潮』を創刊して漸く創作活動を始めたが、とても原稿料を得られるような状況ではなかった。一九一一年二月には、友人岸巖の郷里の知人に出資してもらうため青森県の鱈ヶ沢まで出掛けて行き、そのついでに東北地方を旅している。

この体験を背景に執筆されたのが、青年絵師の直彦が恋愛感情と性欲との間で葛藤しながら北国を旅するという設定の小説『颯風』(『三田文学』一九一二年一〇月号)だ。『三田文学』を主宰していた永井荷風の依頼で書いたのだが、この作のために雑誌は発売禁止となる。風俗を壊乱するとの理由からだった。ところが、これを読んだ滝田樗陰が興味を持ち、谷崎に『中央公論』への執筆を依頼することになるのである。

樗陰が「饒舌子」という匿名で書いた「初対面録」(『中央公論』一九一一年一二月号)には二人の出会いの様子が記されている。一九一一年(明治四四)年の秋、神田南神保町一〇番地の裏長屋に住んでいた谷崎のところを訪れた際、玄関で靴を穿いていた色白の青年を本人と思ったが、それは弟の精二だった。

精二は、「赤ら顔の、太った男」が「中央公論記者瀧田哲太郎」という名刺を出したので、「これで兄も有名になるかな」と思った⁽⁶⁾。

二階で寝ていた潤一郎が漸く姿を現したのは数十分後である。「昨夜夜更かしをしたため失礼致しました」と言つて差し向かいに坐つた潤一郎の印象は、次のようなものだった。

先程チラと見た時ほど無骨らしくもないが、体格はなかなかいい。頭は五分刈が延びて一寸位になつて居るが、毛が著しく縮れて居る。そして俯向き加減にしてまだ世慣れないといふ風に見える。(前掲「初対面録」)

谷崎は、日本の作家では夏目漱石と正宗白鳥、西洋の作家ではアンドレーフとワイルドが好きなこと、大学を中退して創作で立つつもりであること、実は小説よりも脚本を書きたいことなどを語つた。また、酒が好きで毎晩飲むことや、「颯風」に書いた土地が全て実際に立ち寄つた先であることを明かしたので、晩酌を欠かさない秋田出身の樗陰との話は弾んだ。樗陰は、「想像と違つたハイカラでない人」「忌味の無い人」という感想を抱きつつ、谷崎宅を辞す。これが、以後五〇年以上続くことになる谷崎と中央公論社の関係の始まりである。

この時依頼されて書いた「秘密」は、「中央公論」一九一一年一月号に発表された。前掲「初対面録」と同時掲載であるのは勿論偶然ではなく、相乗効果を狙つたものだろう。

夜な夜な女装して歓楽街に出掛ける主人公の「私」が、かつ

て関係を持ったことのある女と再会し、その翌晩、目隠しをされてどこかの屋敷に案内される。「朦朧とした、現実とも幻覚とも区別の附かな Love adventure の面白さ」に、「私」は毎晩のように女の許に通う、というストーリー。「刺青」ともに谷崎の初期を代表する作品である。

発表の一〇日後には、『読売新聞』(一九一一年一月一日付)の「十一月の雑誌」で取り上げられ、「奇怪な藍絵の南京皿の持つやうな魅力を持つたい、作品だ。」と評されている。その一方、同紙一月二六日付の片上伸「新作月評(下)」では、「不思議な快感に耽るあざれた人の心持ちをおもしろく読んだ。」とされながらも、「軽く乾いた唯の好奇心らしいものが浮き上がつて来るやうで、それに気がさして、私にはどうも欺かれたやうな物足りなさが残つた。」と結ばれている。

毀誉褒貶はあつたものの、金策のために走り回つていた半年前を想えば大変な変化である。そして、「お蔭様で『秘密』を載せた号はすぐに売切れました」と樗陰が礼を言いにきたことは、若き谷崎にとつて何よりの励みとなつたに違いない。

谷崎が世に出たのは、永井荷風の評論「谷崎潤一郎氏の作品」(『三田文学』一九一一年一月号)において「現代の群作家が誰一人持つていない特権と技能とを完全に具備している作家」と激賞されたことによるとされている。定説を否定するつもりはないが、樗陰が谷崎に原稿を依頼したのがその約一か月前だったということをお忘れてはならない。しかも、「秘密」の原稿料は文壇作家並みの一枚一円だった。その四年後、雑誌『小説』(一九一五年一月号)に書いた「独探」が六〇銭であつ

たことから、いかに破格の待遇であったかがわかるだろう。

「秘密」を発表し、次作「悪魔」に取りかかっていた一九二二(明治四五)年の一月四日、谷崎は樗陰に誘われて芝の紅葉館で催された読売新聞社主催の新年会に出席した。紋付きの羽織がなかった谷崎は「頗る上等の羽織袴縞御召の二枚褌がまね等一切」を借りて着ていったのだが、それを見た樗陰は、電車の吊革がまにぶら下がりながら「谷崎さん、今日はあなた、すっかり見違へましたね」と言った。

会場には、作家、画家、批評家ら六九人が集まった。会の様子を詳しく報じた翌日の『読売新聞』の記事「文芸家新年宴会」によれば、横山大観が幹事に芳名録を読み上げるよう提案し、読まれた人が起立する運びとなった。谷崎の番になると、幹事が、「颯風」により『三田文学』が発禁となったことを踏まえて「注意人物には特に拍手を願ふ」と付け加えたので、「満場湧くばかりの拍手喝采」という状態になったという。

谷崎は、樗陰がこの会に自分を連れ出したのは、「当時問題の人物であつた私と云ふものを文壇に紹介する一方、付き合ひの狭い私を世間へ出してやらうと云ふ好意」(前掲「青春物語」)によるものであつたらうと推量している。それはおそらく当たっているが、編集者としての計算が働いていた可能性もある。何れにしても、樗陰の目論見は成功したと言える。

さて、『中央公論』掲載第二作「悪魔」の原稿料は、前作よりさらに高い一円二〇銭であった。『中央公論』一九一一年一月二号には、「新年号予告」として、花袋・白鳥・鷗外・三重吉・風葉・藤村・荷風と並んで谷崎の名が載っている。新人作家の

扱いとして、明らかに異例だ。ただし、推敲を重ねたからという理由により、実際は一九二二年二月号の掲載となった。

「悪魔」の主人公佐伯は、神経を病んでいる青年。大学進学のために上京して下宿した叔母宅には二四歳になる従妹の照子がいいた。佐伯は、「男の頭を掻き撈るやうな所があるらしい」彼女に翻弄される。ある時、照子は鼻をかんだハンカチを部屋に忘れていった。佐伯は、鼻風邪特有の臭気を発している「くちやくちやく」になった冷めたい布ぬを「ぬるぬると擦つて見たり、ぴしやりと頬べたへ叩き付けたり」した挙げ句、「犬のやうにべろべろと舐め始め」る。

……此れが洩の味なんだ。何だかむつとした生臭い匂を舐めるやうで、淡い、鹽辛い味が、舌の先に残るばかりだ。しかし、不思議に辛辣な、怪しからぬ程面白い事を、己は見付け出したものだ。人間の歓楽世界の裏面に、こんな秘密な、奇妙な楽園が潜んで居るんだ。……彼は口中に溜る唾液を、思ひ切つて滾々と飲み下した。一種掻き撈られるやうな快感が、煙草の酔の如く脳味噌に浸潤して、ハツと気狂ひの谷底へ、突き落されるやうな恐怖に追ひ立てられつ、夢中になつて、唯一生懸命べろべろと舐める。

フェティシズムとマゾヒズムとが融合した刺激的な設定と描写によつて「悪魔」は話題作となった。作者の谷崎には、唯美主義、耽美主義に加えて悪魔主義というレッテルも貼られるようになる。たとえば、谷崎「羹前書」(『東京日日新聞』、一九

一二年七月)に「悪魔」を書いたら、穢いと云つて攻撃された。」と記されているように、否定的な評も多かった。この文章中、「ネオ、ローマンチズムの或る物」としての耽美派であることは拒まないが「きれいな小説を書かねばならないのなら、私は「耽美派」と云ふ称呼を呪ひたく思ふ。」と述べていることは、「美」の概念規定に関わる問題である点で重要だ。谷崎にとつての「美」とは、女の鼻汁を味わう行為の中にも(にこそ)宿るのである。

三 展開

谷崎は、前掲「青春物語」の中で、「悪魔」によつて「忽ち売れつ兒になり、順風に帆を張る勢ひで進んだ」としている。しかし、「青春物語」が自伝的とは言え小説であること、また「悪魔」発表の二〇年後に書かれたものであることから、鵜呑みにはできず、検証が必要だ。少なくとも樗陰との関係においては、順風満帆だったとは言ひ難い。谷崎の「瀧田君の思ひ出」(『中央公論』一九二五年二月号)では、「その時分僕があまりづべらをしたものだから、ちよつと仲違ひの様」になり、その後一年ほど交流がなかったと回想されている。その原因について、杉森久英は、谷崎が「悪魔」を執筆後友人の長田幹彦と京都へ行き樗陰の原稿の催促に応じなかったためとしている。

一九一二(明治四五)年の谷崎は、四月に京阪地方に遊び放蕩三昧の生活に耽っている。不摂生が祟つて神経衰弱が悪化、汽車に乗ることに強い恐怖感を抱くようになった。七月八日の

徴兵検査にも脂肪過多症で不合格となるが、これは、わざわざ炎天の日を選んで知人の軍医のところに行くなど、徴兵逃れの策を講じた結果でもあった。他にも、豊島(現東京都中央区新川一丁目)にあつた真鶴館に滞在し初の長編「羹」を『東京日日新聞』に連載(七月―十一月)する一方、宿の女将のお須賀さん^①と深い仲になるなど慌ただしい日々を送つていて、おそらく樗陰の依頼を受ける余裕はなかつたのだろう。

樗陰の方は、九月に相馬由也の後任として編集主任になつた。しかしながら、この前後、編集方針やレイアウト等の変化は全く認められず、主任交代以前から樗陰が実権を握つていたと考えられる。

秋も深まつた頃、樗陰は「長田幹彦君か誰か」を介して「もう何とも思つてゐないから何か書け」と谷崎に言つてきた。そこで、谷崎は、「悪魔続編」(『中央公論』一九一三年一月号)の筆を執つたのである。この作品は、「悪魔」に引き続き佐伯が主人公。神経衰弱が激化しつつある彼にとつて、強い刺激を与え続ける照子は悪魔のような存在であつた。部屋へやつてきては挑発的態度をとる彼女の膝へ倒れた佐伯は、次のように言う。

「照ちゃん、君は物好きに己を殺すんだ。己を気狂ひにさせるんだ。……女と云ふ奴は、みんなかう云ふ風にして、男を片つ端から腐らせるんだ。」

二人は関係を結ぶ。照子に想いを寄せていた書生の鈴木は、それを知り照子母子と佐伯を恨むようになる。鈴木が台口で佐

伯の喉笛を挟ったところで小説は終わる。

女性に弄ばれた二人の男が滅びに向かうという設定はいかにも谷崎らしいが、「悪魔」のような過激な描写はない。その主たる理由としては、一九二二年七月三〇日の明治天皇崩御や「悪魔」の不評に対する配慮等を想定することができよう。

他方、前掲「瀧田君の思ひ出」に次のような記述がある。

それで「悪魔」の後編を書いた時には、築地の下宿屋に付きつきりて、僕が鉛筆でどんどん書く、それを傍から受け取つて瀧田君が清書すると云ふ熱心さ、遅筆の僕も最後は夕方から夜までか、つて、一気に二十枚近くも書いた。「あなたがこんな勢で毎日原稿を書いたら倉が建ちますね」と瀧田君は笑つてゐた。

一日に原稿用紙数枚書くのがやつとだった谷崎が「悪魔続編」を完成させることができた背景には、樗陰の強い後押しがあつたのだ。

反面、その弊害も認められる。たとえば、「悪魔続編」は三人称小説だが、前半は「佐伯」を「私」に置き換えることが可能な、言わば偽装された一人称であるのに対して、後半は客観描写が主になっている点。具体例を示すなら、冒頭の「佐伯は、頭の工合が日に増し悪くなつて行くやうな心地がした。」という叙述は佐伯の内部を主観的に表現しているが、末尾の「瘦せて居る割合に、多量の血液が景気よく迸つて手足の指が蜈蚣のやうに戦いて居た。」という叙述は完全な客観描写で、「私」へ

の置換は不可能だ。こうした語りのぶれが戦略的なものならともかく、この作品の場合は無自覚的で効力を發揮しているとは考えられない。

「悪魔続編」には、その他にも、「悪魔」との連続性の乏しさや安易とも思える結末といった瑕疵がある。その原因の一つとして、下宿に詰め隣に坐つて清書している樗陰の存在を数えることに無理はない。編集者の情熱の為せる負の作用と言つてよいだろう。

ともあれ、これ以後樗陰と谷崎の關係は深まり、谷崎の創作の大部分が『中央公論』に載り続けることになった。当時の二人の親密さを表すエピソードが二つある。一九一三（大正二年）の春、谷崎は、本郷の菊富士楼に泊まつて『中央公論』に載せる戯曲を書いていた。木綿問屋の跡継ぎである伸太郎が、慕つて居るおきんが自分を亡き者にしようとしていることを知りながらその運命を甘受するという、これもまた女によつて滅ぶ男の物語だったが、題名が決まらず悩んでいた。原稿を催促に来た樗陰に相談すると、間髪を入れずに「恋を知る頃」はどうかと言ひ、そう決まつた。谷崎は「創作余談」（『毎日新聞』、一九五五年二月）というエッセイの中で、「他人に題を付けて貰つた作品が一つある。」として右の経緯を記しているが、確かに絶妙のネーミングである。「恋を知る頃」は『中央公論』五月号に掲載された。

また、この年の谷崎は放浪生活を続けており、住所が頻繁に変わつて居る。弟の谷崎精二によれば、当時、谷崎の居所を知つて居るのは樗陰のみであった。早稲田の卒業試験を終えた

精二が神楽坂のレストランの二階で友人たちと祝杯を挙げたところ、隣席に樗陰がいた。精二は酔った勢いで話しかけ、兄が早川（現小田原市早川）の旅館「かめや」に滞在していることを聞く。文学青年だった友人たちが葉書に寄せ書きをして投函すると、やがて谷崎から、「卒業おめでとう。僕の住所は人に教へないでくれ」と書かれた葉書が精二の許に届いたという。題名を付けてもらった唯一の人物が樗陰であり、家族さえ知らなかった居所を教えていたのも樗陰だけだった。作家と編集者というレベルを超えた信頼関係が結ばれていたのである。

精二が兄潤一郎の住所を樗陰から聞いた場所について、『明治の日本橋・潤一郎の手紙』所収の「潤一郎の手紙」では神楽坂のレストランとなっているのに対し、同時収録されている「潤一郎追憶記」では、偶然乗り合わせた電車の中となっている。確証はないが、住所を知って友人たちが寄せ書きをしたなどの具体性から考えれば、前者の方が信憑性が高い。二つの文章を突き合わせてみれば、一九二三（大正二）年七月、早稲田大学高等予科英文科の卒業試験を終えた精二は、神楽坂のレストランで樗陰から潤一郎の居場所を聞き、翌日伊豆旅行に行くついでに小田原市早川の「かめや」にいた兄を訪ねた、ということになる。潤一郎は、精二の予想に反して女性と同棲している気配もなく、「颯爽として、元氣よく文壇の話など」をしたという。何れにしても、樗陰だけが住所を知っていた点は一致している。精二は後に学究生活に入り、早稲田大学の文学部長を務める（一九四八年～一九六〇年）ことになるが、この当時は作家を目指していた。第一作「おびえ」が『劇と詩』（一九一一年二

月）に載った後、「鳥屋の子」（一九一二年）、「愛」（一九一三年）等の作品を一貫して『早稲田文学』に発表している。自身の体験を踏まえた「蒼き夜と空」（一九一五年）、「地に傾つて」（同）の（発電所もの）で文壇に認められるようになり、「離合」（阿蘭陀書房、一九一七年）によって作家生活に入った。

初めて『中央公論』に掲載された作品は、「暴風雨のあと」（一九一六年一月号）。潤一郎の「病魔の幻想」と一緒に載っている。次の「侮蔑」（一九一七年五月号）は田山花袋「重荷」とともに載り、その次の「父となる前」（一九一七年一月号）は、「有島兄弟谷崎兄弟小説集」として、里見弴「姉の死・弟の生」、有島生馬「追放者」、有島武郎「迷路」、潤一郎「ハッサン・カンの妖術」と同時掲載だ。こうした状況の背景に樗陰の思惑が働いていないはずはない。樗陰の胸中には、学生時代から知っている精二にチャンスを与えてやりたいという親心と話題性を意識した編集者魂とが混在していたと見てよいだろう。

日本近代文学館所蔵の「滝田樗陰旧蔵資料」の中に、精二の樗陰宛書簡が一通ある。一九一七年四月八日に書いたもので、「五月号」に載せる短編について、二、三〇枚の依頼だったが五〇枚程になりそうだ、それでもいいだろうかという内容だ。「相応の自信のある物を貴誌で発表したい」「五月号にのせて頂けなくとも構はないのです。」といった文言が散見され、かなり気を遣っているのがわかる。この小説は、時期的に見て「侮蔑」に違はなく、「滝田樗陰宛諸氏書簡——大正時代「中央公論」の周辺」（『日本近代文学館年誌 資料探索7』、二〇一二年三月二〇日）の大木志門氏による「解題」にあるように、精二の

要望が叶って約五〇枚の作品となって掲載された。

一方、兄の潤一郎はというと、放浪生活を送りながらも、『中央公論』への発表は、一九二四（大正三三）年「捨てられる迄」（一月号）、戯曲「春の海辺」（四月号）、「饒太郎」（九月号）、一九一五年「お艶殺し」（一月号）、「創造」（四月号）、戯曲「法成寺物語」（六月号）、「お才と巳之介」（九月号）というようにコンスタントに続けていた。「お艶殺し」と「お才と巳之介」については、森鷗外には批判されたが樗陰には大いに気に入られ原稿料の前借りに応じてもらったという。

一九一六年四月一七日、潤一郎は精二に宛てて次のような手紙を書いている。

私は結婚して金に追ひかけられたために、「お才と巳之介」と云ふ悪小説を書いた。私は今度ぐらゐ不快な気持ちで創作をした事はない。

そして、この作品を非常に誉める文学者がいるとして、「私是不運にして腑がひない自分を悲しみ、今の一般の文壇の浅薄なを悲しむ。」と続けている。ただし、この部分について、身近にいた精二が「半ばてれ隠しでもあるう。」（前掲「潤一郎の手紙」）と解釈していることも視野に入れるべきだ。

「お才と巳之介」は、呉服商の跡継ぎの巳之介としたたかなお才との男女関係を軸に、手代の卯三郎が絡む三角関係や、その卯三郎が巳之介の妹お露をかどわかす経緯などが綴られた小説。「毒婦ものの流れをひいた歌舞伎的江戸趣味の作品」（『日

本近代文学大事典^②）の一つと位置づけられるが、評価は概して高くない。

その一方、「お艶殺し」と併せて谷崎の「ストーリーテラーとしての才を遺憾なく發揮した」作とする見方（千葉俊二「編年体・評伝谷崎潤一郎」、別冊国文学改装版「谷崎潤一郎必携」、学燈社、二〇〇二年四月二〇日）もある。所謂「近代小説」としてどうかという評価軸を設定するか否かによって見解が分かれるのだが、たとえ負の感情を以て原稿用紙に向かったにしても、結果的に谷崎の能力を引き出したのだとすれば、「お才と巳之介」執筆の意味はあったことになる。

一九一六（大正五）年も、「神童」（一月号）、「恐怖時代」（三月号）が『中央公論』に発表され、四月号では「谷崎潤一郎論」が特集された。赤木桁平「谷崎潤一郎氏に就いて」、谷崎精二「谷崎潤一郎論」、本間久雄「我が国唯一の唯美主義悪魔主義の作者」、正宗白鳥「谷崎君」、長田幹彦「谷崎潤一郎論」、上司小剣「谷崎氏の作品」、加能作次郎「天才か、神童か、伝奇小説家か」によって構成されている。この前後、「中央公論」で個人特集が組まれているのは、一九一七年の石井—ランシング協定で歴史に名を残すことになる時の外務大臣の石井菊次郎（一九一六年二月号）、樗陰が敬愛して止まなかった徳富蘇峰（同五月号）、そして民本主義に立脚する言論活動を展開し始めていた東京帝国大学教授の吉野作造（同六月号）らで、二九歳の駆け出しの作家である谷崎が取り上げられるのは明らかに異例だった。さて、前掲「滝田樗陰旧蔵資料」には、樗陰宛谷崎書簡が三通含まれている。一通は年月不明だが、「塩原へ引移る」とい

う記載から、一九一九（大正八）年夏のものだと推定される。塩原行きの準備で創作が捗らないため「始めから書改めやうかとも思つて居」る旨が告げられ、原稿提出を「モウ一二日待つてくれませんか。」と願ひ出ている。

一九二〇年三月一三日付書簡は、「鮫人」（『中央公論』一九二〇年一月号、三月号、四月号、五月号、八月号、九月号、一〇月号）の原稿の訂正について記したものの。同年九月三日付書簡には、「是非お目に懸りいろいろ御相談して置きたい事が出来た」ため会いたいこと、出された条件は保留とするも「今月十五日までに五十枚以上と云ふ事だけ」は断ることが述べられている。この三通目については作品名が挙げられていないが、「鮫人」を度々休載した谷崎に対して「襦陰から何らかの申し入れがあったのだろう。」「〔解題〕、「滝田襦陰宛諸氏書簡——大正時代「中央公論」の周辺」という推測が成り立つ。

これに先立つ七月一二日、谷崎は襦陰に「鮫人」の原稿が遅れる事情を説明する書簡を出していた。猶予を与えてもらえれば今後年内は一回も休まないとした上で、

「鮫人」はあまり無理をせず、何年か、つても立派なものを書き上げた決心ですから、どうか其の積りで御辛抱願ひます。

と書いている。

結局、作品は未完に終わり、谷崎の約束と決心が果たされることはなかった。そのことに襦陰がいかに関与していたかを考

える必要がある。

「鮫人」の冒頭には岑參しんたんの五言律詩「送張子尉南海」（張子の南海に尉たるを送る）が置かれ、その四句目に「崑里雜鮫人」（崑里鮫人を雜う）がある。鮫人は、中国に伝わる人魚に似た想像上の人間。当時、谷崎が関心を寄せつつあったバルザックの文学を意識した意欲作だった。

『中央公論』一九二〇年一月号に載った第一回には「附記」が添えられていて、「最後まで必ず書き通す決心である」こと、一〇〇〇枚程の長さになるので「隔月ぐらゐに纏めて出す計画である」こと等が告げられている。実際には、二月号には書けず、三月号から五月号には連続して載せたものの、六月号と七月号には出せなかった。八月号の「鮫人作者記」では、休載について「編輯者に対し読者に対しまことにお気の毒だった。」とし、「そのお詫びに今後は休まず連載する積りである。」と述べている。

九月号、一〇月号には書いたが、一一月号には、小説ではなく「鮫人」の続稿に就いて」という文章を載せた。またもや休載となったことについて「今後二度と再び言訳をする必要がないやうにして置」くための釈明を綴ったもので、活動写真に時間を取られるようになったため長編を書く余裕がなくなったとして、次のように記す。

にも拘らず、私は従来瀧田君の督促に攻められて、出来るだけ間に合はせるやうにして居た。同君の話に依ると、あの原稿に対しては毎月中央公論社へ宛て、読者諸君からの

苦情が少からず舞ひ込むのださうである。やれ「一と月置

きでは感興が殺げるから困る」とか、「毎月掲載の分量をもう少し殖やしてくれろ」とか、いろいろの投書が来るので、編輯者としての責任上気がでないのだといふ。

続けて「作者は読者に対する義務の前に、自分自身に対する義務がある。」と主張、今後は「読者諸君の性急な催促には頓着せずに、暇に任せ感興に任せて、好きな時に少しづ、書き貯めて行かうと思つてゐる」旨を告げている。

「鮫人」をめぐる一連の動きを時系列に従つて整理する。谷崎は大作を隔月で連載するつもりだったが、その希望は叶わず毎月の連載となつた。一九二〇年七月、毎月出したいが無理はしたくない心中を樗陰に告げ、九月にはやはり毎月は難しいという相談を樗陰に持ちかけるも入れられず、一〇月、ついに自分のペースで発表することを決意するに至つた。

「鮫人」の続稿に就いては、読者に向けて書かれた文章だ。しかし、たとえば「瀧田君の督促に攻められて」という言い回しに、樗陰に対する牽制を見ることができるといふ言ひ。

考慮すべきは、谷崎が樗陰との約束を違えたのは「鮫人」に限つたことではない点だ。「嘆きの門」(『中央公論』一九一八年九—十一月号)は未完に終わったし、「呪はれた戯曲」(『中央公論』一九一九年五月号)は四月号掲載予定だったのを一か月延ばしてらつてゐる。

四 結語

谷崎は、樗陰によって不本意な形で作品を書かされた面があつた。それが、大正期の『中央公論』に発表されたものに代表作がほとんどないことの原因である可能性もある。反面、樗陰の強引な依頼と督促がなかつたら文壇における破格の待遇を受けられたかどうか疑問だ。また、『中央公論』の原稿料やその前借りが当時の谷崎の生活を支えていた事実も無視できない。

ともあれ、「いやだと思つても、あの緒ら顔のはち切れさうな様子を見ると、どうしても断り切れなかつた。」(前掲「瀧田君の思ひ出」という樗陰の存在なしに、谷崎は谷崎となり得なかつたはずだ。ノーベル文学賞の最終選考に何度も残つた日本を代表する作家の才能をいち早く見抜いた伯樂の功績を改めて見直すべきと考える所以である。

(注) 本名哲太郎、一九二五年一〇月二七日没。「樗陰」の号は「莊子」から取つたもので、同時に尊敬していた評論家高山樗牛にも因むとされる。「樗」はヌルデ(ウルシ科の落葉小高木)あるいはゴンスズイ(ミツバウツギ科の落葉小高木)で、人間にとつては何の役にも立たない木。用なし故に伐採もされず悠然と生きて時に旅人に木陰を提供できもする。莊子の説くこの「無用の用」に感応したところに、樗陰の心意気が垣間見えよう。

(2) 一八九九年に秋田県第一中学校と改称。

(3) 日常生活を省みて清く正しいものにするために西本願寺に属する若い僧侶たちが結成した修養団体。

(4) 「青春物語」によれば「山形、青森等」、弟谷崎精二「潤一郎追憶記」・君島一郎「采寮一番室」によれば秋田。

(5) 「颯風」には、樗陰が慣れ親しんだ秋田市の千秋公園とそこからの眺めが次のように描写されている。

北国の春は今が酣であつた。お城跡の公園の桜は満開で、錦のやうに咲きこぼれた暖い花の蔭に、月の光がほんのりと漂ひ、高台から見下ろす旧城下の街々は、濃い霞の立ち罩めた大空の下に、夢の如く眺められた。佐竹騒動や姉妃のお百の伝説と結びついて、美しい、荒唐な、奇怪な連想を生む秋田の街。水底を照らす漁火のやうに、春の夜のおぼろの空気を揺がせて、点々と連なる賑かな燈火の数々。長い間水室に鎖され、颯風に吹かれて、荒びに荒んだ直彦の心は、和やかな羊の毛皮のぬくまりで包まれたやうに、人間らしい一道の暖か味の萌え出づるのを覚えた。

(6) 「潤一郎追憶記」(『群像』一九六五年一〇月号) 参照。

文学青年であったとは言え、学生の精二が樗陰来訪の意味を即座に理解したことは見逃せない。編集主幹となる前の一九一一年の時点で、『中央公論』の樗陰という存在が周知されていた証となるからだ。

(7) 谷崎潤一郎「私と中央公論」(『中央公論』一九六二年一

〇月号) 参照。

(8) 前掲「青春物語」参照。

(9) 「滝田樗陰」(中公新書、一九六六年一月二五日) 参照。

(10) 谷崎の従兄江尻雄次の妻。

(11) 前掲「瀧田君の思ひ出」参照。

(12) 後「続悪魔」と改題。

(13) 菊富士ホテルの前身。

(14) 「明治の日本橋・潤一郎の手紙」(新樹社、一九六七年三月二五日) 参照。

(15) 田原屋と思われる。

(16) 大学令による大学となるのは一九二〇年。

(17) 前掲「潤一郎追憶記」参照。

(18) 日本近代文学館編『日本近代文学大事典』(講談社、一九七七年一月一八日) 参照。

(19) 樗陰の孫である諏訪間園井さんが、二〇一〇年七月に寄

贈した原資料約三八〇点。

(20) 注(18)に同じ。

付記

本稿は、『秋田魁新報』土曜文化欄に連載(二〇一四年四月五日)二〇一五年七月二五日、全六八回)した「望嶽楼の夢／滝田樗陰と近代文学者」の一部に加筆し、再構成したものである。

(秋田県立大学教授 平成元年度修了生)